

三井文庫の二〇周年記念にあたって

林 玲 子

財団法人三井文庫が創立二〇周年を迎えられたことに對し、同文庫から学恩を蒙ることが大であった者の一人として、心からお慶びを申し上げたい。近世・近代の経済史・経営史を研究する人びとにとって、三井文庫の存在は極めて貴重なものであり、他の諸分野についても同文庫の史料は幾多の研究課題を与えたといつてよい。

私にとつても、三井文庫史料とは二〇年を上回る長いつき合いとなつた。修士論文で呉服問屋白木屋をとりあげ、その後江戸の間屋仲間を通して近世の商品流通を扱うことを考えた者にとつて、三井文庫はまさに史料の宝庫であつた。戸越に文部省史料館と併存していた旧三井文庫に、一九六〇年代前半ごろから通う日が多くなつた。そこで近世の商業史料の扱い方や、問題点の捉え方など、両館の研究員の方がたから懇切な指導を受けたことは、その後の私の研究にとって何よりの指針となつた。高度成長の波はまだ両館に及ぶまでに至らず、夏は旧型の扇風機が一つ、冬は暖房なしという玄関わきの小さな閲覧室で史料を繰つた。厳冬には手と足を温めるため、かいろを二つ持ちこんで頑張つた記憶が

ある。昼休みには戸外の緑陰で、両館の方がたや閲覧仲間とバレーボールなどを楽しんだ。こうしたつながりのなかで、いろいろな示唆を受け、具体的な指導を受けることができたし、さらに三井以外の商家史料の調査にも、文庫の研究者の方と同行する機会が多くなり、研究者のグループへの手引もしていただいた。ただし、三井文庫の史料は余りにも尠大であり、当面自分の研究課題にそつたものに視点が限られ、大学院時代には三井の史料に全面的に取組むことはできなかった。

一九六五年に大学院を終え、流通経済大学に勤めることとなった。三井文庫も戸越を去り、現在の中野の地に新館が創設され、一九六五年には財団法人三井文庫として新しいスタートを切られたところから、快適な閲覧室でまた史料に接することになった。さらに、三井銀行の依頼による『三井両替店』の編纂・刊行や、『三井高棟伝』の編纂に関係することになり、文庫の史料に全面的に依拠する仕事であるところから、毎週のように三井文庫に通ったこともあった。こうした二十数年に及ぶ三井文庫との接触のなかで、多くの恩恵を受けたことに深く感謝するとともに、その間に感じた史料利用についての要望を若干述べさせていだきたいと思う。

史料目録について

大学院時代に旧三井文庫に通った当初、まず史料目録に目を通すため、何日もの日時が必要であった。文庫への収蔵順によると思われる目録は、時代順や項目別の分類はなされておらず、最初から最後まで目を通さねばという史料があるかわからない。現在は年代別目録があり、それだけ調べやすくはなったが、項目別の目録がないため、研究課題によつてはやはり全目録をみなければならぬ。そして必要な史料名のカードないしノートを作るといふ、史料閲覧前の作業に多くの時間をさかねばならなかった。

ただし、この目録が刊行され、個々の研究者が館外で調べることができるならまだ救われるが、すべて館内備え付けのものであり、コピーもできないところから、遠方からの来訪者にとってはまことに不便である。現在、各地の史料館・歴史館では史料目録を作成・刊行するのみならず、コンピューター利用により必要な史料を寸時に示すことができるような工夫が始まっているという。年々在庫が増える図書館でさえも、機械化により閲覧者にどれだけ便益が与えられるかを考えねばならなくなっている。三井文庫のように、すでに集められた史料が在庫の中心となっている場合、まず現存する史料の目録刊行、さらに閲覧者の必要とする史料の提示が即座にできるための工夫が必要ではないだろうか。全史料を対象にすることはすぐには困難であっても、時代や項目を限定してできる範囲のなかで、事項別や史料種類別の目録作成・刊行を希望すること切である。

未整理史料・寄託史料の公開

『三井両替店』や『三井高棟伝』の編纂に際し、改めて三井文庫史料の大きさを知ると同時に、まだ未公開である諸史料の多いことに驚いた。『高棟伝』のための必見史料である北家からの寄託史料や、三井諸家からの寄贈文書で未整理のものなど、未公開のものが多数あり、中田易直氏の『三井高利』（吉川弘文館）で紹介されている文書でさえも、寄託史料であるとの理由で未公開であることを知った。そしてこれら文書の整理・公開については予定やその見通しもたたないとのことで、非常に落胆したものである。文部省史料館、その後身である国立史料館では、購入・寄贈史料を各家別に一人のスタッフが担当し、長期の時日をかけて整理を行ない、目録を作成するときいている。また、私が一年間国内留学をした滋賀大学経済学部付属史料館では、週日の半分を公開日にあて、半分は史料整理を行なう日とされていた。二名のスタッフでは、閲覧者への応対と史料整理の両方を毎日行なうことが困難であると思われた。ただし、

最大の史料群である中井家文書については、その整理のための特別な配慮がなされていた。もっとも、本年三月に伺った折のお話では、一〇万点余の史料のうち、九万点は整理済との由である。同館の史料整理は、丁寧なごみ除去や補修、小型和紙箋への毛筆による表題記入、史料用の糊によるその表題箋の貼付、閲覧に便利なように工夫された収蔵箱など、他史料館でも学ぶべき点が多い。

三井文庫には近世史料だけでなく、近代史料も購入あるいは寄贈されるものが多いであろうから、整理に忙殺されておられる事情は察せられるのではあるが、少くとも何時になったら公開できるかその見通しだけでも示してほしいものである。また、北家などからの寄託史料についても、他の所蔵史料と同様に公開を進める方向で御検討願いたい。

以上、二点にしぼって要望を述べさせていただいた。戦前からの伝統を持ち、史料館として先駆者的な役割を果してこられた三井文庫が、今後とも広く社会に貢献されるであろうことを願って筆をおきたい。